

令和4年度(2022年度) 宣真高等学校 学校評価

1 めざす学校像

仏教的な慈愛の精神を基調とした、他者への思いやりを実践できる女性を育成するとともに、社会において自主的・自立的に活躍できる女性となるためのキャリア教育の充実を目指す。

普遍的な心の教育と、可変的な時勢の求める有益な教育内容をよく吟味して、生徒の内面に自分で考えて自分で道を切り開くための教養と気概を育てたい。

そのため生徒一人一人の個性、適性をよりよく伸ばし、生き生きと自己表現できる教育環境を整えていく。

また規範意識、公衆道徳、マナーの面において他者の模範となるような生徒を養成して、地域から信頼される学校作りを地道に持続する。

創立から百年を越える伝統校として恥ずかしくない教育的信用と教育的実績を積み上げていく。

2 中期的目標

1. 学力・授業力の向上と特色・ICT機器を有効に活用する学習指導

- (1) 本年度から1年全生徒と全教員にタブレット(iPad)を配布導入したので、授業にとどまらず学校生活全般においてその活用を推進実践する。また各教室に設置されたICT機器(プロジェクター、インターフェイスボックス)と教員用ノートPCを連動させた授業をはじめとする各種活動を活性化し、より広く興味を喚起させ、生徒の理解度・思考力、解決法を育成するよう図る。
- (2) 成績が低迷している生徒、学習到達度の低い生徒への対応として、授業内だけではなく、授業外においても持続的なケアを行い、学校全体の学力の底上げを図る。
- (3) 放課後講習を設定・展開して自発的に学びの機会を広げたい生徒の学力向上の意欲に応えていく。また複数教科において自分の進路に必要な教科を選択できるよう、希望制の講習の設定と人員配置に努める。
- (4) コース・エリア独自の特色ある授業を継続して、希望する進路に寄与する知識・技能を習得させる。総合コースの設定科目については、各エリアの習得内容の特化を図るべく講座を新設して単位を増やし、選択科目を精選する。

2. 進路保障と進学実績に結び付く指導基盤の確立

- (1) 自分の進路を考え、進んでいく力を養うために診断テストやガイダンスを実施し、進学に有益な情報を不足なく発信・提供して、希望する大学・短大・専門学校等への安定した合格実績を伸ばす。
- (2) キャリア教育の一環として、スキルアップの有効な指標となり得る各種検定や資格試験(日本漢字能力検定、実用英語技能検定など)の成果の向上を図る。
- (3) 就職希望者への情報提供、事前指導、面接練習を計画的に実践し、就職試験を突破するための社会性・適応力等を伸長させるように図る。
- (4) 不登校生をカウンセリング室体制により支援して、教室復帰、登校の定着、授業参加へとつながるように、カウンセラー・CR担当教員・担任・保護者・教科担当者らがグループとなって情報や対処法について連携を図る。

3. 多様な価値観の共有と安心安全な学校生活作り

- (1) 集団生活における規範意識と基本的な生活習慣を健全に育成するとともに、ジェンダーレスへの適切な対応など多様な受け入れ態勢を整えて、公平公正な社会に主体的に参加できる感性を涵養する。
- (2) 自然災害発生時の避難体制や新型コロナウイルス感染者判明時のすみやかな対応について、危機管理の観点から対処案については平素から教職員全体で共有して、とるべき安全策を新しくアップデートしていく。
- (3) 体育館改築にともない敷地の四分の一が使用不可となるにあたり、体育の授業や運動部の練習場所の確保、移送の段取りを策定して、安全に快適な学校生活を送れるように工事計画と連動させていく。

4. 運営体制の適正化と教職員の連携促進

- (1) 校務及び業務実態の見える化を引き続き図り、働き方改革の一助として勤務環境のスリム化・合理化を推進する。
- (2) 健康的かつ効率的な勤務形態のあり方について、分掌配置も含めた全体的な人員配置について人事面での配慮を促進する。

学校教育自己診断アンケートの結果と分析 [令和4年度実施分]

●【総括】令和4年度の特筆すべき点については、前年度から続く新型コロナウイルス予防対策の緩和による学校行事の復活正常化、及び新学習指導要領の1年生からの適用開始と、その1年全生徒と全教員にタブレット(iPad)が導入された点が挙げられる。

令和4年度も感染症予防の観点とその禁止条項の順守のため、行事の保護者観覧数の制限、1年合唱コンクールの中止や文化祭での飲食物販売見合わせなど、規模を縮小せざるを得なかった行事もいくつかはあった。しかし一方で、従来実施されていた主な行事イベントはほとんどが復活を遂げることができ、春の校外学習(1,2年高野山参拝、3年宝塚歌劇鑑賞)、修学旅行の実施(3年熊本・九州、2年関東方面)、秋の校外学習(1年京都グループ散策、3年USJ)、保育フェスタ3年舞台発表、1年かるた大会、3年卒業前旅行・スケボー合宿などが以前のように実施された。その影響で、学校行事に対する自己評価アンケートの肯定的評価(Aよく当てはまる+Bやや当てはまる)の割合は、下記のように前年度より上昇がみられた。()内は前年度。このA+Bの割合が80%を超えることを目標としている。

1 [有意義で生徒が楽しめるよう考えている] 教員 73%(52%) 2 [積極的に参加できる工夫がある] 生徒 79%(76%)

企画運営する教員たちの方が高評価なのは、行事を通してしか実践できない体験型学習の必要性を強く感じているからであろう。

また今年度1年生から逐次導入されたタブレット(iPad)について、教員対象の機能・使用法説明会を前年度末から校内で行い、5月G.W明けに1年全生徒に配布し、使用活用法の説明ホームルームを実施。教員もタブレットを使用して、授業においては課題の提出と返却、オンライン授業、長期休暇中の課題作成と提出、観点別評価でのポートフォリオ作成やアンケートによる授業の振り返り、小テストなどの活用に努めた。また学年、学級経営にも役立ち、日々の体温を記録管理したり、電子連絡版で終礼事項を配信したりすることで、欠席者にも確実に重要事項を伝達できるようになった。発表ノート機能を利用して夏季休暇中、個々に「夏休み日記」を記載入力するような使い方も行った。今後、より効果的で生徒が参加しやすい「iPad授業支援システム」の勉強会を予定している。

●【学校運営・特色・学校設備関連】 肯定的評価の割合

1[各分掌や委員会、学年間の連携は円滑に機能している] 教員 70%

2[他校にない特色、独自性がある] 生徒 92% 保護者 88%

3[学校生活は全般的に楽しく充実している] 生徒 78% 保護者 86%

4[設備、ICT機器などうまく活用されている] 生徒 80% 保護者 94% [ICT機器を意欲的に研究実践している] 教員 70%

1 組織間の情報の共有速度や方法、意思の疎通の度合いに、まだまだ温度差と不徹底さが点在している。関係部署より声を拾って柔軟に体制を変革していく必要を感じる。2 本校独自の取り組みに対する肯定的評価は、今年度も90%前後を維持している。時勢が要求する教育の在り方を研究し、可能なものから順次どん欲に取り入れ、不易流行のスタンスを堅持しながらも、伝統校に恥じない女子高カラーを守り続けたい。3 コロナ禍渦中だった前年度より、わずかながらポイントが上昇しているのは、上記総括欄に記した通り、ほとんどの学校行事が復活したためではないか。授業外の思い出を友人たちと校外で共有体験できるのは、学校生活の醍醐味の重要なパーツと思われる。4 教室でのプロジェクター使用による授業も定着し、一部オンライン授業の活用、講堂行事の各教室への映像配信なども常態化している中、1年の全生徒タブレット保有による種々の活用開始が加わったのが肯定的評価の割合に表れている。生徒の肯定的評価の学年別内訳は1年89%、2年81%、3年75%と分かれていて、タブレット活用の恩恵に浴している1年が最も増加した。他方、教員の自己評価が思いのほか低いのは、去年同様にICT機器・iPad機能を十分に把握・使用しきれていない自信のなさ、反省の思いの現れと考えられる。上記のごとく「iPad授業支援システム」の勉強会を継続的に計画していく。

●【学習・進路指導関連】 肯定的評価の割合

1[先生の授業の内容・話し方はわかりやすい] 生徒 72%

2[授業を通して知識・技能が身についたと思える] 保護者 81%

3[生き方や将来について考えるような指導が行われている] 保護者 80% 教員 89%

4[進路について適性に合った丁寧な指導が行われている] 生徒 79% 保護者 81% 教員 77%

1 授業理解の肯定的評価は近年70%前後に停滞しており、大きな要因の一つとしてICT機器利用について教える側の指導法がいまだ十分ではないこと、また参加型授業の展開法に工夫の余地があることが推察される。教授方法について事前・事後の準備と振り返りについて、教員が集団で学び合う勉強会・研修会を計画していきたい。2 の保護者の満足度は前年度と変わらず、コース・エリアの授業内容の習得に対する好評価と思われる。3 のキャリア教育や進路全般についてのビジョン作りは、高校生として必ず感得してもらいたい部分なので教員も特に力が入っているようである。4 の進路指導に対する満足度は前年度とほぼ変わらないが、教員は9ポイント下がっている。これはコロナ禍の年度において、生徒個人の進路への意欲、希望の汲み取りと調整に例年より時間と労力を要したことが原因ではないか。教員側として本当に十全の対応ができたのか忸怩たる思いが残ったものと推察される。

●【生活指導関連】 肯定的評価の割合

1[家庭との連携、認識の共有ができています] 教員 89%

2[学校の遅刻・服装・スマホなどの指導方針に共感納得できる] 保護者 72%

3[いじめや問題行動に真剣に対応している] 生徒 78% 保護者 81% 教員 86%

1 ずっと90%前後の割合であり、教員が生活指導面で家庭との連携が不可欠であるとの認識の高さを物語っている。2 については保護者の方より例年、スマホ使用を許可する場面・時制についてのご提言をはじめ、制服の着こなしに対するご助言などをいただいている。周辺事情や他のルールとの整合性・妥当性を調整して、導入可能と判断できた事項から随時変更していきたい。特にスマホ利用ルールについては次年度から禁則を緩和する方向である。3 のいじめ対応については、生徒は微増、保護者教員は80~90%を推移している。前年も記述したが、いじめ対応の始まりは事象発生前の、平素からの生徒との信頼感を育てるところにある。そうでないと聴き取り時に事態を正確に把握できない恐れがあり、適正な指導・円満な解決に難をきたす。肯定的評価がこれ以上の値を示すことのないように、常に迅速・丁寧にトラブル対応していきたい。

●【その他の活動関連】 肯定的評価の割合

1[不登校生について進級・進路保障の配慮がなされている] 保護者 83%

2[命の大切さ、社会のルールを守る意識・態度を育てようとしている] 生徒 82% 保護者 88%

3[クラブ活動は活発で積極的に行われている] 保護者 91% 生徒 88%

1 本校のCR(カウンセリング室)や保健室の体制で、ほぼ全員のCR生が考査・進路決定を経て無事卒業を迎えている。家庭と関係教員・CRとの緊密な連携あつてのことと、ご理解をいただいている割合と推測できる。2 は心の教育、公共心についてであり自他の生命の重さ、自他にとって有意義な環境作りについて、自分で考察できるようなヒントを提示して高評価を維持したい。3、コロナ禍で部活動が厳しく制限されていた前年度よりそれぞれ1ポイント上昇したのは制限が緩和されてきたためと思われる。しかしクラブ加入率が運動部約19%・文化部約24%と、合わせても全校生徒の半数に達していない。これは4~5月の新入生のクラブ勧誘時にまだ密・接触を避ける方針が生きており、旺盛な勧誘活動を控えたためか。次年度は旧に復して大規模な勧誘の時間を設定したい。

学校評価委員会からの意見 【総括・学校運営・特色】アンケート回答は無意識にバイアスがかかっているものだから、一方の評価と対極の評価の双方から読み取った方がいい 【学習・進路指導関連】電子黒板などで興味付けがうまく運ぶのは簡単だが、その先の本当の理解にまで導く授業センスが教師に求められている・進学実績が向上するのは喜ばしい 【生活指導関連】いじめなどの悩みを相談する相手(教員)を生徒がわかるように設定するといいいなぜこの校則が必要なのかを説明した上で校則なので生徒も納得できる 【その他の活動】不登校生はさまざまな心身の不調が要因。治療という方針についても理解を求めては・クラブ指導は教員の長時間労働の原因の一つ。外部指導員の導入や地域移行クラブに委ねるという方策も超過勤務解決の一手段 など

3 本年度の取組内容及び自己評価 ◎自己評価アンケートの指標についてはA+Bの肯定的評価80%以上を目標とする

中期的目標	今年度の重点目標	具体的な取組計画・内容	評価指標	自己評価
1. 学力・授業力の向上と特色・ICT機器を有効に活用する学習指導	(1) 1年全員にタブレットを導入して学校生活全般に有意義な活用を図り、プロジェクターと教員ノートPCの連動による、多角的な教授法を整備・実施する	a 今年度から1年に導入されたタブレットを利用して、授業内の活用のほか、課題・アンケートのやりとり、学年連絡の送信、健康管理記録など多方面広範囲にわたり利便化に供する。 b プロジェクター、インターフェイスボックス使用による授業のわかりやすさの向上を目指して、生徒の好奇心・理解力の満足度を高める	a 自己評価アンケートの[ICT授業への取り組み] A+B 1年の肯定的評価 (前年度比較) 教員の活用法研修会の実施 第1学年の利用状況報告 b 自己評価アンケートの[ICT授業への取り組み][授業内容・話し方のわかりやすさ] A+B 肯定的評価 (前年度比較)	a [ICT授業への取り組み]の1年の肯定的評価 ・生徒 89%(前年度81%) 中学時代からタブレット使用に慣れている生徒が多く、iPadの機能を意欲的に吸収する様子が見られ、満足度の上昇に利したようだ。教員対象のiPad授業支援の研修会も1・2学期に実施して、教員間に使用上の習得力の差が生じないよう図った。 1年クラス運営面では終礼事項の一斉配信、課題連絡、日々の体調管理記録、長期休暇の日記記録、京都散策時の校外利用、考查模範解答の配信、文化祭クラス研究の映像作成など多方面で活用できた。 b [ICT授業への取り組み]の肯定的評価 ・教員 70%(前年度76%) ・生徒 80%(前年度82%) [内容のわかりやすさ]の肯定的評価 ・生徒 72%(前年度75%) ICT機器を利用してからの授業について、生徒には一定の評価を得ているが、教員側には新しく導入される機器の習熟にとまどいや、十分に活用しきれているのかという自信のなさが生じているようで、今後慣れるに従い上昇すると推測される。
	(2) 成績不振者への授業中、授業後のケアなど継続的な個別指導を実践する	授業時に理解が及んでいないと思われる生徒や考査の得点の振るわない生徒、また小テスト・提出物等平常点の少ない生徒などを対象にして、指名補習、プリント課題学習の点検、提出物による平常点の加味などを行い、成績不良により進級・卒業に支障をきたさないよう指導する。	自己評価アンケートの[補・講習への取り組み] A+B 肯定的評価 (前年度比較)	[補・講習への取り組み]の肯定的評価 ・教員 77%(前年度76%) ・生徒 70%(前年度72%) ・保護者 74%(前年度75%) 夏季休暇中に成績不良者対象の補習をはじめ、教科単位で放課後に補講を行った。年度前半はまだ新型コロナウイルス感染対策の密対策が強く、1回の講習時の人数制限を設けたのが、肯定的評価が前年度とほぼ横並びである要因ではないか。 成績不良による原級留置生徒数はゼロであった。
	(3) 学力向上意欲に応えるための授業外講習を計画的に実施する	希望者を募る「放課後特別講習」の募集告知、実施期日の計画表の発表、教科別に希望できる90分授業を実施して、継続的に学力向上に取り組む習慣を形成する。	「放課後特別講習」の学年別の実施教科、実施回数、実施人数 (前年度比較)	1年 国語・英語 年間35回 約15名 (前年度 国語・英語 35実施 15名参加) 2年 国語・英語 年間35回 約15名 (前年度 国語・英語・数学 17回実施 10名参加) 3年 国語・英語・社会 年間15回 約5名 (前年度 国語・英語・数学 13回実施 5名参加) 各学年とも希望者は前年度とほぼ変わらず、実施予定の通り講習を行うことができた。
	(4) コース・エリア独自の特色のある授業を見直しつつ継続し、希望進路につながる知識・技能を習得させる	a 総合コースの2年次からの4エリアの特色・目的を検討精査して改編し、エリア設定科目と選択科目を特化する。 b 過去2年間中止していた保育系進学コースの大きな体験的学習の一つである発表行事、保育フェスタ「なでしこ劇場」を形態を工夫して再開する。 c 看護医療系コース独自の放課後「校内予備校」(看護医療予備校講師)を継続して計画設定して実施する。	ab 共通 自己評価アンケートの[コース特色満足度] A+B 肯定的評価 (前年度比較) a 総合コース改編結果 b 保育フェスタ実施結果 c 校内予備校の実施結果	ab [コース特色満足度]の肯定的評価 ・生徒 92%(前年度90%) コロナ禍で中止・縮小されたコース独自の設定が今年度徐々に再開されたのが微増の原因と思われる。 a 総合コース4エリアの設定科目を2から3講座に拡張して、自由選択科目を1講座減じ、エリアカラーを明確化してキャリア教育により沿う形とした。 b 宣真こども園児を招待し、入替制で講堂への密集を避け3年のリトミック舞台発表を中心に実施した。保育系コース生の集団としての経験値の向上が見られ、職能的自信の強化が図られたと思われる。 c 今年度は2、3年生ともにコロナ禍前の計画通りに実施、看護医療系コース生の学習機会を旧に復することができた。

<p>2. 進路保障と進学実績に結び付く指導基盤の確立</p>	<p>(1)自分の進路を考える力を養うための診断テストやガイダンスを計画、進学に有益な情報を発信提供して希望の大学・短大・専門学校への合格率を伸ばす</p>	<p>a 継続して導入している診断テスト(ベネッセ)を有効に活用して、教員が適切な事後指導を行い、生徒自身の振り返りを促して能動的に学力向上に取り組むモチベーションにつなげる。 診断テストのG T Z (学習到達度)の指標S A B C D…を向上させようという目標を生徒に示していく。</p> <p>b 進学ガイダンスを通して受験に関する情報や疑問に対する相談を行う。自己推薦書・作文の書き方指導、グループおよび個人面接の指導などを丁寧に行う。</p> <p>c 進路希望に則した合格率の向上に努め、進学実績の向上につなげる。進学に関する潮流を見極めて志望校の決定を調整する。指定校推薦(特別推薦)枠の有効な活用と振り分け、指定校の枠・人数の拡充を図る。実力ある生徒の一般入試対策にも力を入れる。 看護系進学コースからの看護系学校への合格実績について、前年度維持以上の成果を目指す。</p>	<p>a 診断テストの実施回数、G T Zの各ゾーン向上度</p> <p>b 進学ガイダンス(会場=池田市民文化会館)の実施状況</p> <p>自己評価アンケートの [説明会の設定] A+B 肯定的評価 (前年度比較)</p> <p>c 入試区分別、学校種別合格者数と全体に占める割合(前年度比較)</p>	<p>a 全コース 基礎力診断テスト 1年…3回 2年…3回 3年…2回 看護特進コース 実力診断テスト 1年…3回 2年…3回 G T Zの推移(上位A・Bゾーン該当率) 1年 A 0%→7.6% B 18.5%→17.3% 2年 A 3.6%→4.7% B 12.3%→13.1% 3年 A 3.6%→0% B 10.1%→9.4% 上位ゾーンには上昇している学年もあり下降を見せた学年もあるが、全体の平均G T Zは年度内で15%の伸びを見せているのは底上げ効果があったと判断し得る。指標向上に全学年で取り組み、生徒に声掛け奨励し続けている影響もあると思われる。</p> <p>b 3年対象進路ガイダンス(5/11)参加校 80校 2年対象進路ガイダンス(6/15、11/30)参加校のべ 120校 1年対象進路ガイダンス(1/18)参加校 40校 [説明会の設定]の肯定的評価 ・生徒 82%(前年度81%) ・保護者 81%(前年度78%) ガイダンスの実施もコロナ禍以前の回数をこなすことができ、進路指導の説明会や情報提供への生徒保護者の肯定的評価も80%前後と高くなっている。</p> <p>c ●入試区分別合格率(前年度) A0入試 44%(30%)・指定校推薦 40%(56%) 公募推薦 11%(8%)・一般入試 4%(4%) ●合格者数と全体に占める割合(前年度) 大学 128名…39%(90名…39%) 短大 61名…19%(46名…20%) 専門学校 139名…42%(96名…41%) ※上記内、看護系学校 44名(36名) A0入試で早期に進路決定を望む生徒が特に多かった年度であった。一般入試希望者は13名が合格しており今後も適切にチャレンジを勧めていきたい。 同志社大学、近畿大学、龍谷大学、関西医科大学、大阪経済大学、神戸学院大学、摂南大学、関西外国語大学、追手門学院大学・武庫川女子大学など今年も在校生に励みとなる進学実績となった。</p>
	<p>(2)キャリア教育の一環として知識・技能習得のスキルアップである検定・資格試験合格の成果向上を目指す</p>	<p>a 漢字能力検定、英語技能検定の受検予定者を対象とした放課後対策指導を計画し、合格率の向上を図る。 また教科主導で推進している各種資格試験の合格に向けた取り組みを継続する。</p>	<p>a 検定の合格者数または合格率(前年度比較)</p> <p>※食物調理技術検定は4年度は2級を実施できなかった。</p>	<p>a 漢字検定 ●年間合格率(前年度) 2級 20%(20%) 準2級 34%(25%) 3級 33%(32%) 4級 50%(13%) 英語検定 ●年間合格率(前年度) 2級 30%(6%) 準2級 24%(30%) 3級 45%(31%) 漢字検定全体は準2級の合格率が上昇し、能動的に勉強する漢字好きの生徒が増えた感がある。英語検定2級合格者は初の2桁10名に乗ったが、反面、英検準2級の低下が危ぶまれるため、今後積極的に受検するようにまずは放課後の英検対策講座への参加から呼び掛けていきたい。 食物調理技術検定 ●年間合格率(前年度) 3級 94%(100%) 4級 77%(100%) 食物調理技術検定4級の低下は、一部生徒の講習欠席率の高さが原因と考えられる。授業・講習での指導は当然であるが、自学自習の努力を疎かにしないよう受検生徒に自覚を促していく。</p>

		b 保育技術検定(保育系進学コース)において高い合格率を維持するよう、セミナー・補講の計画を関係教科・各学年と擦り合わせて策定し、年次合格を経て卒業までに1級を取得できるよう指導する。	b 保育技術検定各級の合格率(前年度比較)	b 保育技術検定 ●年間合格率 (前年度) 1級 80%(95%) 2級 89%(76%) 3級 93%(97%) 4級 100%(90%) 各級の合格率80%以上であるが、コロナ対策のため一斉講習の難しい実技系分野(造形・家庭看護)があるため、全級90%以上とならなかったと推察される。しかし1年夏季に3、4級を全員取得しておくことで3年次に1級合格率の上昇につながるため、長期的視点から下位級の習熟度を高めていきたい。
(3)就職希望者への情報提供、事前指導、面接練習を行い、社会性や適応力を伸長させる	a 企業・ハローワークとの連携を図り、希望者対象に就職ガイダンスを計画・実施する。 b 挨拶の練習、書類作成のサポート、模擬面接、事前見学の引率などキャリア推進部と第3学年が主となって行い、内定者を増やす。	a 就職ガイダンス等の実施状況 b 就職内定者数 (前年度比較)	a 就職希望者の一斉ガイダンスは、夏季休暇中に午前午後の2部制に分割して実施した。2学期以降の個人呼び出しと面接指導も順調で、売り手市場の波もあってほぼ一回目の受験で内定をいただけた。 b 就職内定者 21名(前年度26名) 他縁故就職4名 希望者内定率 93%(前年度93%) 海上自衛隊をはじめ、検査・食品製造・製造・販売・サービス・医療福祉と多方面にわたる職種に対応した、マンツーマン指導が功を奏している。	
(4)不登校生のカウンセリング室体制の支援による登校・授業参加へのバックアップと関係者の連携を強化する	aCR(カウンセリングルーム)生認定、配慮生徒の学年内調整と考査・行事時の個別対応を遅滞なく円滑に進める。 b 支援教育、見守り対象生徒へのきめ細かい対応を行い、関係施設との緊密な連絡をとり生徒の進路保障に取り組む。	a 自己評価アンケートの[不登校生に対する進級進路保障のこまやかな配慮] A+B 肯定的評価 (前年度比較) b 関係施設との連携、面談	a[進級進路保障のこまやかな配慮]の肯定的評価 ・保護者 83%(前年度83%) CRの認可ルールを明文化したことで保護者の理解と協力が得やすくなっている。ICTルームで週1時間、情報・英語の授業を受講できるのは今年度も生徒に好評であった。1年はタブレットを通して教科担当から直接課題指示を確認できるようになった。 b 関係施設への見守り報告、施設職員を交えた面談など個々の家庭状況に応じて、該当生徒の人権を尊重しつつ安全な学校生活を全うできるように対処した。支援、見守り対象者は年々微増している。	
3. 多様な価値観の共有と安心な学校生活作り	(1)規範意識と基本的な生活習慣の育成とジェンダーレス対応の基盤を作り、公平公正な社会実現のための感性を確立する a 「いじめ防止基本方針」に則り、情報モラル、人権意識を高めて自己を愛するよう他者へも思いをいたす感受性の大切さについて折に触れて指導する。 b 基本的な生活習慣の指標の一つとなる「遅刻」件数を減らすよう、担任だけでなく生徒指導係の教員をはじめ全教員が諭し、励ましていく。服装着こなしも含めた生活指導上の方針について、生徒保護者に理解を求めると。 c 痴漢、薬物被害、自転車事故に巻き込まれないための、自発的な防犯意識の醸成を図る。 d 制服の着こなしに関して、ジェンダーレスの生徒の希望も踏まえて、選択式の制服組み合わせを検討・導入する。	a 自己評価アンケートの[いじめ問題への対応] A+B 肯定的評価 (前年度比較) b 年間遅刻件数 (前年度比較) 自己評価アンケートの[生活指導の理解度] A+B 肯定的評価 (前年度比較) c 啓蒙・安全講習の実施 d ジェンダーレスの観点も含めた制服委員会における変更状況	a[いじめ問題への対応]の肯定的評価 ・教員 86%(前年度91%) ・生徒 78%(前年度77%) ・保護者 81%(前年度82%) いじめ事象の早期発見は、平素からの生徒と教員間の信頼関係の深さの程度にかかっており、相談、聴き取り、関係者対応、保護者連絡、説諭を円滑に進めるため、今後も密に生徒に係わる必要を感じる。 b 年間遅刻のべ発生件数 (その年次学年の前年度数) 1年 1057(612) 2年 821(951) 3年 1467(788) 年間のべ総数 3347(2351) [生活指導の理解度]の肯定的評価 ・生徒 78%(前年度78%) ・保護者 72%(前年度74%) 前年度より1年1クラス増、2年2クラス減、3年4クラス増(全体で3クラス増)という学年構成の変化も遅刻数の増減の理由だが、多い数字であるため、継続して折々に注意喚起していかないといけない。 c 交通安全指導(自転車通学含む)、痴漢被害対策指、薬物乱用防止講習、情報モラル指導講習を実施した。タイムリーなニュースを題材にして身近な問題だという自覚を植え付ける重要性を感じる。 d 今年度から全学年が新制服で揃った。すでにジェンダーレス化の一環でスラックスを導入し、ネクタイも企画進行中。コーディネイト自由化にも踏み切り、体温管理を個々で行えるよう制服アイテムを増やした。生徒にはおおむね好評であるように映る。	

<p>3. 様々な価値観の共有と安心な学校生活作り</p>	<p>(2) 自然災害へのすみやかな対応、適切な準備、感染症等に対する教員全体で共有すべき対処法のアップデートを図る</p>	<p>a 前年度に引き続き新型コロナウイルス感染対策としての校内予防とその啓蒙活動について、常に新しい知見に基づいて安全な学校生活を送れるように計画する。</p> <p>b 災害発生時の対応について南海大地震を念頭に置き、身近な危機という意識を醸成して地震・火事に対応した避難意識を養う。</p>	<p>a 府教育庁ガイドラインの周知、出校停止者の把握、学習活動・部活動の形態についての指示</p> <p>b 自己評価アンケートの[地震火災時の教育] A+B 肯定的評価 (前年度比較)</p>	<p>a 前年度に続きコロナ感染対策情報についての逐次プリント配布、教室掲示、ガイドライン方針の教員間の周知を行った。特に部活動と学習形態の禁則事項の変更については迅速に告知して、現場に混乱が生じないように気を配った。</p> <p>b [地震火災時の行動についての教育]の肯定的評価 ・生徒 78% (前年度 82%) ふだんから新型コロナウイルスという見えない恐怖にさらされているためか、地震火災といった物理的恐怖への警戒心がやや薄くなったように感じられる。天災は忘れた頃に…の用心を喚起刺激したい。</p>
	<p>(3) 安心して快適な学校生活を保障するための施設改修、また体育・部活動の代替場所の確保・移送を計画的に行い、生徒の健康・安全を守るよう努める</p>	<p>a 体育館新築について、生徒の諸活動に影響を及ぼす各種計画を関係者で協議して、通路制限・代替活動場所などで不便が生じないように図る。</p> <p>b 体育館に先立って完成する部室棟への物品の移動と整理について、事故のないように順次生徒と顧問と工事関係者で連携して実施する。</p> <p>c 本館、別館で内装工事が行われていない部屋の改装及び別館外壁の塗装を行い、新校舎のデザイン上の統一を果たす。</p>	<p>a 自己評価アンケートの[施設設備の満足度] A+B 肯定的評価 (前年度比較)</p> <p>体育館代替場所の確保利用状況</p> <p>b 新部室棟の完成・利用状況</p> <p>c 別館、本館の内外装工事の完成状況</p>	<p>a [施設設備の満足度]の肯定的評価 ・保護者 94% (前年度 93%) グラウンドを横切るように、情報センター・なでしこホール・新部室棟に通じる屋根付き歩道を設け、本館からの移動授業時の利便を図った。また体育の授業については9月から12月まで2限連続授業に時間割変更したうえで、スクールバスで生徒を移送して大阪青山大学の北摂体育館をお借りして実施した。またグラウンドも半分利用できないためハンドボール部は他校の体育館や長居競技場を借り、バレーボール・バスケットボール・バドミントン各部分は、放課後や夏季休暇期間、北豊島中学校、神田・緑丘・秦野小学校の近隣校から、池田・箕面・伊丹・宝塚・尼崎市内、遠く門真・守口市の体育館やスポーツセンターへ移動しての練習を貫徹できた。関係各位の尽力に頭が下がる思いである。</p> <p>b 初夏に2階建て新部室棟が完成、12クラブが旧部室から引っ越した。全室エアコン完備で透けないガラスを部室入口(グラウンド側)に使用した。1階に倉庫、洗濯機部屋、男女トイレを設け、防球ネットを部室棟の正面全面に張り、安全に供している。</p> <p>c 夏季休暇期間に、書道教室内装、美術教室内装と別館外壁と廊下の色・意匠を、本館・紫峯館と同一のものに改装し一体感を出した。</p>
<p>4. 運営体制の適正化と教職員の連携促進</p>	<p>(1) 校務・業務実態の見える化を図り、勤務環境のスリム化・合理化を推進する</p>	<p>出退勤管理システムをチェックして長時間残業者へのヒヤリングを行い、業務、分掌の時期的多忙さの要員を探って把握し、特定の部署・教員に負担のかからないよう配慮する。</p>	<p>退出時間の遅い教員へのヒヤリングと対処、校務などの体制・編成の見直し</p>	<p>退出時間の遅くなる要因を聴き取った結果、やはり1保護者連絡、2クラブ活動、3教材研究が主であった。教材研究についてはパワーポイントの制作や「総合的な探究」の事前準備などほぼ新規の取り組みに時間を費やしている。また保護者連絡は、生徒案件が生じた際に、保護者が勤めを終えた時刻から頻りに家庭とやりとりせざるを得ないとのこと。そこでまず部活動について試合引率や休日出勤の労を分散軽減するために、第3の顧問を設定し3人目の顧問に任せられるところは任せる形態を次年度運動部を中心に導入する予定である。今年度から設置した「学習指導係」が放課後講習の計画実施業務を一括して吸収したので、進路指導部や各教科の業務がスリム化できた例に倣いたい。</p>
	<p>(2) 健康的かつ効率的な勤務形態を目指し、人員配置の配慮を促進する</p>	<p>ストレスチェックの継続的实施と切り上げ退出可能日の推進を図り、校務の人員の適正化によって一人当たりの負担を減らし、上司に相談しやすい職場環境の醸成に努める。</p>	<p>学校行事日などの切り上げ退出の実施、希望に沿った分掌配置による人員配置の負担軽減</p>	<p>休校日の教員出勤日の切り上げ退出の奨励を今年度も4回設定した。また次年度から校務分掌の各係の配置人数を減らせるところは減らして、1人2分掌の原則になるべく近づける体制に部分変更を施す予定である。人事配置については本人の第1・第2希望に適合するよう配置したが、特に強い希望がある場合は個別に事情を聴いて配慮している。</p>